

研究論文

子ども自身、保護者、観察者による、発達障害児のレジリエンス評定

関西大学心理臨床センター 樋口 隆弘
関西大学心理臨床センター 湯浅 龍
関西大学臨床心理専門職大学院 石田 陽彦

要約

私たちは、発達障害児のレジリエンスの向上を目指したキャンプを実施し、レジリエンスの構成要素である社会性などを下位尺度に含む、The Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) を用いて、キャンプ前後の子どものレジリエンスの変化を、子ども自身、保護者、観察者がそれぞれ評定した。その結果、向社会性得点の平均値は、子ども自身、保護者、観察者それぞれの評定で変化は見られなかったが、保護者と観察者から見た子どもの困難さ得点の平均値が有意に低下した。ただし、三者間において、子どもの困難さと向社会性得点の平均値に差が見られた。困難さにおいては、保護者と観察者を比較して、保護者は子どもの困難さを強く捉えていた。向社会性においては、保護者と観察者の他者評価と比較して、子ども自身の自己評価が高かった。つまり、子ども自身は、他人の気持ちを考えて行動しているつもりでも、実際はそのような行動を取っていない場合があるなど、発達障害特性の一面が出ていると考える。子どもの困難さや向社会性を多角的に評価し、三者間の評定の違いを明らかにすることで、その後の子どもや保護者への支援に活かすことができる可能性が示唆された。

キーワード：レジリエンス、発達障害、キャンプ、SDQ、評定差異

I. はじめに

発達障害児に対する、早期からの療育や学校場面での支援は日々発展してきている。発達障害児をもつ保護者、発達障害児をクラスにもつ学校の先生方など、多くの人々が発達障害児の特性を理解しようとし、その理解も深まりつつある。定型発達児の特性が一人ひとり異なるように、発達障害児の特性も一人ひとり異なるが、発達障害児は、コミュニケーションの苦手さや聴覚や嗅覚の感覚過敏、微細運動の不器用さなど、周囲に理解されにくい特性を持つことが多い。そのため、発達障害児に対する人々の理解が深まりつつあっても、日常生活において、発

達障害児が困難を抱えることは、定型発達児と比べて多いことが想定される（下山・村瀬, 2013）。その時に、注目すべきものがレジリエンス（Resilience：自然回復力）である。レジリエンスには様々な定義があるが、ここでは“自身が直面する困難に立ち向かい、乗り越え、立ち直る能力”（Putnam, 1997/2001）と定義する。レジリエンスを構成する要素としては、“困難に対する積極的な態度、事態がよくなるだろうと思える信念、柔軟性”（Grotberg, 2003）などがあげられる。レジリエンスを高めることによって、日常的に直面する小さな困難、さらには将来的に直面するかもしれない大きな困難を乗り越えることが出来る。一方で、レジリエン

スがうまく機能しなければ、日常的に直面する小さな困難を乗り越えることができず、社会での不適応など二次的な障害が生じる可能性が高くなる。

これまでに私たちは、発達障害児のレジリエンスの向上を目的としたキャンプを実施し、キャンプ前後での子どものレジリエンスの変化を、The Strengths and Difficulties Questionnaire; SDQ (以下、SDQ) (Goodman, 1997) を用いて、子ども自身、その保護者、観察者それぞれで評定した。その結果、子どもの向社会性は、子ども自身、保護者、観察者それぞれの評定で変化が見られなかった。一方で、子どもから見た自身の困難さはキャンプ前後で有意差が見られなかったが、保護者と観察者から見た子どもの困難さはキャンプ後で有意に軽減し、発達障害児のレジリエンスが向上したことが示唆された(樋口・湯浅・石田, 2017)。レジリエンスキャンプで、子どもたちのレジリエンスが向上するのかどうかを明らかにすることが目的であったため、子ども自身、保護者、観察者の三者それぞれにおいて、子どものレジリエンスの変化をキャンプ前後で比較したが、三者間の評定や認識に差があるのかどうかを明らかにしてはなかった。

Smith (2007) の報告によると、情緒面や行動面に関連する不安や抑うつにおいては、思春期前の子どもの場合は、最良の評価者が保護者であり、思春期後の子どもの場合は、最良の評価者が子ども自身であった。また、不安特性においては、子どもと保護者、子どもと教師の評定は弱い相関 ($r = 0.14 - 0.28$) であったが、保護者と教師の評定には強い相関 ($r = 0.95 - 0.96$) があった (Miller・Martinez・Shumka et al., 2014)。

三者間における子どもの困難さと向社会性の評定や認識の差異を明らかにすることで、レジリエンスキャンプ後の日常生活上の支援に活かせる可能性があると考えられる。そこで本稿では、子ども自身、保護者、観察者の三者間における、

子どもの困難さと向社会性の評定や認識の差異を明らかにし、その評定や認識の差異に基づいて、その後の支援を考察することを目的とする。

II. 方法

1. 対象

レジリエンスキャンプに参加した、知的に遅れはないが、コミュニケーションの苦手さや多動性などの特性を持つ、小学3年生から小学6年生までの15名の子どもたちとその保護者を対象とした。なお、キャンプ参加の条件として、医師により広汎性発達障害、注意欠如多動性障害のいずれかの診断を受けていること、とした。

2. キャンプの実施方法

レジリエンスキャンプは、奈良県宇陀郡曽爾村の国立曽爾青少年自然の家にて、計3回(2013年7月6日～7日、9月14日～16日、2014年1月25日～26日)実施された。15名の子どもたちを班分けし、リーダーと呼ばれる大人(関西大学臨床心理専門職大学院の大学院生)が2人ずつ各班を担当した。観察者は臨床心理士有資格者1名と関西大学臨床心理専門職大学院の修了生と現役生7名であった。レジリエンスを向上させる意図を持たせたキャンプのストーリー性やプログラム、SDQの詳細や評定方法については既出の論文(樋口・湯浅・石田, 2017)を参照されたい。

3. 統計解析

キャンプ前後で、子ども自身、保護者、観察者が評定した、自己評定版、親評定版、教師(観察者)評定版SDQそれぞれにおける、子どもの困難さと向社会性得点の平均値をSPSS® version 24.0を用いて、一要因の分散分析と多重比較(Tukey HSD法)を行い比較した。

4. 倫理的配慮

レジリエンスキャンプに参加していただく前

に、キャンプ期間中に子どもたちにSDQを実施する旨と研究資料として匿名で公表する旨を文書でお伝えし、すべての保護者から了承を得た。

Ⅲ. 結果

キャンプ前後で、子ども自身、保護者、観察者それぞれがSDQを用いて評定した、子どもの困難さと向社会性得点の平均値を三者間で比較した(図1)。

まず、キャンプ前の子どもの困難さ得点において有意差が見られた($F(2, 42) = 8.57, p = 0.001$)。子どもと観察者では、困難さの得点に有意な差は見られなかった($p = 0.182$)が、子どもと保護者では、困難さの得点に有意な傾向が見られた($p = 0.063$)。つまり、子どもの困難さにおいては、日常生活においても子どもと関わっている保護者は、子どもの困難さを強く捉える傾向にあった。一方で、日常生活において子どもと関わっていない観察者は、子どもの困難さを保護者と比べて弱く捉える傾向にあった。

キャンプ後の子どもの困難さ得点においても有意差が見られた($F(2, 42) = 25.61, p < 0.001$)。子どもと保護者では、キャンプ前と同

様に、困難さの得点に有意な傾向が見られた($p = 0.063$)。一方で、子どもと観察者では、キャンプ前とは異なり、困難さの得点に有意な差が見られた($p < 0.001$)。つまり、子ども自身および保護者よりも、第三者である観察者は、子どもの困難さを弱く捉える傾向にあった。

次に、キャンプ前の子どもの向社会性得点において有意差が見られた($F(2, 42) = 10.62, p < 0.001$)。保護者と観察者と比較して、子ども自身の向社会性得点が有意に高かった(子ども vs 保護者： $p = 0.001$, 子ども vs 観察者： $p = 0.001$)。つまり、向社会性においては、保護者と観察者の他者評価と比較して、子ども自身の自己評価が高かった。

キャンプ後の子どもの向社会性得点においても有意差が見られた($F(2, 42) = 4.43, p = 0.018$)。子どもと保護者を比較して、子ども自身の向社会性得点が有意に高かった($p = 0.014$)。一方で、子どもと観察者を比較して、子ども自身の向社会性得点に有意な差は見られなかった($p = 0.437$)。つまり、向社会性においては、日常生活においても子どもと関わっている保護者は、子どもの向社会性を低く捉える傾向にあった。一方で、日常生活において子どもと関わっていない観察者は、子どもの向社会性を保護者と比べて高く捉える傾向にあった。

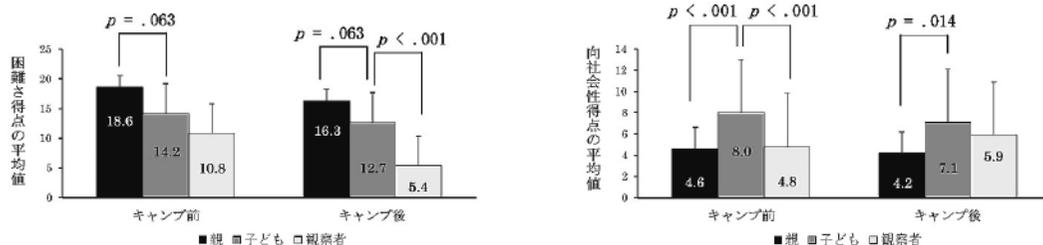


図1 キャンプ前後の、子ども自身、保護者、観察者間における、子どもの困難さと向社会性得点の評定差異
困難さは得点が高いほど、子どもが困難さを抱えていることを表し、向社会性は得点が高いほど、子どもの向社会性が低いことを表している。

IV. 考察

本稿では、子ども自身、保護者、観察者が評定した、レジリエンスキャンプ前後における、子どもの困難さと向社会性得点の評定差異を比較検討した。

子どもの困難さにおいては、子どもと保護者を比較すると、キャンプ前後で保護者が評定した得点が有意に高く、子どもと観察者を比較すると、キャンプ後で観察者が評定した得点有意に低かった。保護者も、キャンプ前後において、子どもの困難さ得点は有意に低下した(樋口・湯浅・石田, 2017)ものの、子ども自身と観察者に比べて、子どもの困難さを強く捉える傾向が明らかになった。さらに観察者は、レジリエンスキャンプを通して、子どもの困難さの軽減を見て取ったが、子ども自身の実感としては、観察者が見て取ったほどの軽減は見られなかった。ゆえに、臨床現場で関わる医師や心理士、学校の教師といった第三者は、自分たちが思っている以上に、子ども自身や保護者が日常生活や学校生活で感じている、客観的には見えにくい負担や苦労があることを念頭に置いた上で関わる必要があることが示唆された。

子どもの向社会性においては、保護者と観察者の他者評価と比較して、子ども自身の自己評価が高かった。これは例えば、「私は、他人に対して親切にするようにしている。私は、他人の気持ちをよく考える」という向社会性の下位項目で考えると、子ども自身は、他人の気持ちをよく考えて行動しているつもりでも、他人からすると、気持ちをあまり考えてくれていないと感じたり、行動面としては他人の気持ちを考えた行動を取れていなかったりするなど、発達障害特性の一面が出ているのではないかと考える。このように、周囲の大人が子どもの考え方や行動面で心配していることでも、子ども自身は心配していないこともあると思われる。しかし、子ども自身が自分ではできていると思うことを大人が注意したり過度に心配したりして、子ど

もの自尊心を低下させてしまうのは望ましくない。ゆえに、レジリエンスキャンプのように、失敗を重ねながら、大人の力も借りながら困難を乗り越えて、他者と上手くコミュニケーションを取れる体験を重ねて学んでいくことが大切ではないかと考える。

以上のことから、子どもの困難さ得点においては、保護者は観察者と比べて得点が高く、子どもの向社会性得点においては、保護者は観察者と比べて得点が低かった。つまり、日常生活でも子どもと関わっている保護者の評定は子ども自身の評定よりも厳しく、日常生活で子どもと関わっていない観察者の評定は子ども自身の評定よりも甘くなる可能性が示唆された。観察者である第三者は、今回のレジリエンスキャンプなどのイベントがあると、その前後での変化を大きく捉える可能性があることを念頭に置き、評定に臨む必要があると考える。

レジリエンスという客観的に把握しにくい要素を評定するという試みを通して、子どもの困難さや強みを、子ども自身や保護者、観察者が単独で評定するよりも多角的に評定することで、より正確に子どもの困難さと強みを捉えることができ、今後の支援に活かせる可能性が示唆された。

謝辞

調査に協力していただいたキャンプに参加した子どもたちとその保護者の方々、観察者の方々に深く感謝申し上げます。

文献

- Goodman, R. (1997). The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note, *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38(5), 581-586.
- Grotberg, E. H. (2003). What is Resilience? How do you Promote it? How do you Use it? In

子ども自身、保護者、観察者による、発達障害児のレジリエンス評定

- Grotberg, E. H. (Ed.), *Resilience for Today: Gaining Strength from Adversity*, 1-30, Westport, CT: Praeger Publishers.
- 樋口隆弘・湯浅龍・石田陽彦 (2017) 発達障害児におけるレジリエンスキャンプの有効性: The Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) を用いた評定, *子どもの心とからだ*, 26(3), 280-285.
- Miller, L. D, Martinez, Y. J, Shumka, E, et al. (2014). Multiple Informant Agreement of Child, Parent and Teacher Ratings of Child Anxiety within Community Samples, *The Canadian Journal of Psychiatry*, 59(1), 34-39.
- Putnam, F. W. (1997). *Dissociation in Children and Adolescents: A Developmental Perspective*, New York: The Guilford Press.
- 中井久夫 (訳) (2001) 解離: 若年期における病理と治療, みすず書房.
- 下山晴彦・村瀬嘉代子 (2013) 発達障害支援必携ガイドブック: 問題の柔軟な理解と的確な支援のために, 金剛出版.
- Smith, S. R. (2007). Making Sense of Multiple Informants in Child and Adolescent Psychopathology: A Guide for Clinicians, *The Journal of Psychoeducational Assessment*, 25 (2), 213-232.

